# 〈近代本論第十九回：幕末的定位のハブ――私塾と剣道場と不良旗本〉

参考文献

※福沢諭吉『文明論之概略』岩波文庫（初版は１８７５年）
※勝小吉『夢酔独言』東洋文庫（１８４３頃執筆）

幕末維新を生き抜いた動乱期の人々にとって、その定位遍歴を一言で要約する言葉があったとすれば、それは〈一身二生〉だろう。福沢諭吉はこう述べている。

〈試みに見よ、方今我国の洋学者流、その前年（※前半生）は悉皆（しっかい）漢書生ならざるはなし。悉皆神仏者ならざるはない、封建の士族にあらざれば封建の民なり。あたかも一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し。〉（福沢諭吉『文明論之概略』〈緒言〉、１２ｐ）

この二つの定位の大範疇、封建日本と、開化の日本が、一人の我が身において「形影（けいえい）の互いに反射する」のを見る、これが維新的定位の対位法的本質であった。開化の先頭を走る福沢にして、その教育のルーツは漢学である。

こうした対位法的縮重の基本は、主題が用意されていること。それが重ねあわされ、展開の途中で、次の主題がすでに登場することである。対位法のハイライトでストレッタ（凝縮）と呼ばれる定型の技法があるが、これはまさに、維新的対位法の基本であったと思う。尊皇と佐幕、攘夷と佐幕、四民平等の予感と士分の古い自尊の念が、十分に展開をとげるいとまもなく、次々に重なり合って、一人の志士の心を多角化し、多元化し、そして思い切った対位法へと自己展開していく。

縮重の前にしかし、長い時間をかけて、定位の類型はテーマ化され、多元化されていた。心学、漢学（儒学）、国学、そして蘭学の定位類型とその系譜をすでに確認してある（第一章）。この多元化は、根本的に主体的であり、また「四民横断」的であった。つまりそれは階級混淆的、またある場合には無化的であった。それはもっとも階級閉鎖性の強い漢学もそうであるし、また階級限定性（富裕な町民、農民層）の強い国学においてすらそうだった。逆に四民的分断は、士農工商のマクロ範疇にとどまらず、それぞれの身分の中で、上下の位階づけは煩瑣に、そしてある種の永久運動のように持続することを本性としていた。したがって、国学のネットワークが地域を越えて日本的な広がりを見せ始めると、そ

の階級的同一性は、豪農豪商を中心とした運動であったにもかかわらず、農工商身分内部の無限運動の停止、その局面における階級性の無化を意味したのである。国学に特に特徴的であったこのモメントは無視してはならないと思う。維新前夜、青山半蔵は、木曾の深い山中にいて、この燎原の火のごとき学派の広がりに胸を躍らせている。

〈半蔵の周囲には、驚くばかり急激な勢いで、平田派の学問が伊那地方の人たちの間に伝播し始めた。飯田の在の伴野と言う村には、五十歳を迎えてから先師没後の門人に加わり、婦人ながらに勤王の運動に身を投じようとする松尾多勢子（※後に岩倉具視の右腕として活躍する）のような人も出て来た。おまけに、江戸には篤胤大人の祖述者をもって任ずる平田鉄胤のようなよい相続者があって、地方にある門人らを指導することを忘れていなかった……半蔵にして見ると、彼はこの伊那地方の人たちを東美濃の同志に結びつける中央の位置に自分を見いだしたのである。〉（島崎藤村『夜明け前』第一部、１－２１２ｐｆ）

これはもちろん、一つの定位型の中での全国的ネットワークの広がりだが、幕末維新においては、こうした定位型が複雑に重合していくから、およそなんらかのネットワークに関係、あるいはその存在をすぐ近くに感じることが、むしろ常態化していたと考えるべきである。

まず定位類型が孤立することなく、隣り合い、重合する。漢学から蘭学へ、漢学から国学へという修養の履歴は幕末に典型的な重合だった。青山半蔵（藤村の父がモデル）はたとえば、漢学の素養をつけ、それにあきたらなくなって、国学へと向かっている。その手ほどきを最初にしたのは、漢学と国学を同時に学んできた、漢方医の教養人だった。諭吉や勝の例はよく知られている。最初から蘭学をめざすことは稀で、まず官学、藩校、私塾での漢学的な修養を経ることが普通だった。しかしこの幕末的〈一身二生〉こそ、時代の要請でもあり、近代化の〈速度〉を個人の履歴のうえで反照したものであったと見ることができる。

その過程が、天保改革の失敗、大塩の乱、そして黒船来航から開国へという外圧とそれに押し流される国策の混乱によって、一気に加速化される。そうして江戸的定位は、イデオロギー的闘争へと変容する。定位の多元性は、封建社会内部での主体的なエートス選択を可能にするものだった。それが重合し、混淆しあい始めた時、エートスははげしいイデオロギーの嵐にさらされ、自らもその嵐の中に〈志士〉として飛び込んでいくようになったのである。

尊皇、佐幕、攘夷、開国の四大イデオロギーと、すでに見た、江戸的定位、心学、儒学、国学、蘭学の衝突、化合、新たな定型の発生と消滅のめまぐるしさは、まさに幕末維新動乱期の定位カオスの実体を形成していく。

その個々の位相は、すでに何度もテーマ化されている。歴史研究のみならず、大佛次郎の『天皇の世紀』のようなすぐれたドキュメンタリー、また彼の『鞍馬天狗』、あるいは『大菩薩峠』をはじめとする、文学化も、現在の大河ドラマまでを包括するならば、それ自体一つの大きな文化潮流であり、事後的な定位の自己反省であると見るべきだろう。

ここではしたがって、そうした個々の定位事象にあらためて入ることはせずに、あくまでこのカオスの律動を、秩序とまではいかなくても、一つの、あるいは複合する社会ネットワークに組織していった、ハブに注目してみたい。そのハブは、私塾と、剣道場、そして少し意外かもしれないが、下級武士という階級そのものである。それは下級武士が、様々な意味で体制的に護られていた〈士〉の階級からの離脱を始めたからだった。その離脱の最大の原因はもちろん生活の困窮、自壊である。

この階級性の解消が、一つのハブとして機能し始めるのは、まさにその生活の自助努力が無階級的な経験を蓄積していくからだった。この過程が顕在化するのは、雄藩の下士、そして困窮旗本においてである。前者は雄藩改革の人材の基体となり、そこから志士が出現する。後者は幕臣のあるタイプを生んでいった。例えば長谷川平蔵、遠山景元である。彼らは〈不良旗本〉と括られる、曖昧で放埒な青春時代を送っていた。それがまさにハブ機能を果たしていたことが、彼らの〈名奉行〉としての後半生に生かされることになる。幕末はまさに、こうしたハブの織りなす社会的ネットワークの広がりと強靭さにおいて、江戸期を通じて、いな日本近代史を通じて、その頂点をなす時期だった。志士とはつまり、私塾で世界観を磨き、自らの困窮において無階級的な感性を獲得し、剣道場で〈人士〉となりつつ、他のおそろしく多才多様な〈人士〉を知る、そういう過程で、めまぐるしく移り変わる〈時勢〉に対処できる広い〈見識〉と社会活動の基盤を自己形成する、そういう存在であったと要約できる。

私塾は官学、藩校と両極性をなすものだったが、必ずしも対立していたわけではない。私塾はむしろ、官学の占有する上士の教育と平行して、あるいは間隙を埋める形で〈草莽〉の世界に増殖していったものだった。これは幕末最大の私塾、〈松下村塾〉の歴史がよく語っている。それは藩校〈明倫館〉と対立するというよりは、その補填のために創設された。松陰ではなく、松陰の叔父が私塾として始め、そこで教育を受けた松陰は、〈明倫館〉の師範となり、そこで教えた俊才を率いて、再度〈松下村塾〉を始める。もちろんその時には、もはや藩校の補填機関とする意図はまったくなく、開放的で階級混淆的な、真の〈草莽〉の教育が始まる。農民層、足軽層が大挙して押しかけた（伊藤や山県たち）。しかし上士、中流が排除されたわけではない。〈明倫館〉で松陰の教えを受けた木戸孝允（桂小五郎）は、塾頭のような格で塾を手伝った。

この木戸の場合が、志士の自己形成の標準型と言えるのではないかと思う。つまり藩校、私塾、そして剣道場を自己の活躍の基盤としていったからである。彼は一流の剣士として名を馳せ、そのカリスマ性が藩内においても、また対外交渉（特に薩摩との交渉）で大きな力を発揮していた。総じて木戸に率いられた長州は、イデオロギーにおいても、志士のハブの活用（藩校、私塾、下級武士、剣道場）においても、代表的であり、範例的であった。

これは薩摩の場合とは対照的である。西郷は幼い時の義侠心からの喧嘩の際に右腕を切られて使えなくなり（剣が握れなくなり）、剣道を断念して学問に集中した。その学問も藩校（造士館）と私塾よりもっと小さな個々の師弟関係、そして最後には政治的な結社を私塾として立ち上げる（精忠組）。その結社の同志が大久保利通だったわけだが、彼もま

た剣は苦手で、道場のキャリアも持っていない。あるいはここいらに、長州閥と薩摩閥の定位的メンタルのようなものの違い、そして肌合いの悪さを認めるべきかもしれない。

長州は攘夷に走ったにもかかわらず、その志士の定位型から言うと、松陰は言うにおよばず、最初から国民的、国家的視野を保持しており、これは一言で言って、彼等の〈社会の広さ〉、つまり私塾と剣道場を使いこなしていく、そのハブ活用と、新たなハブの形成能力にあったのではないかと考えたくなる。対して西郷、大久保の自己形成ははるかに藩内的、かつ藩内派閥的であり、その開明性は、〈上から〉、つまり重豪（しげひで）や斉彬のような強い〈蘭癖（らんぺき）〉のある開明的君主から移植されたものであることが特徴的である。つまり彼等は、〈草莽〉あるいは形成されつつある日本統一国家を飛び越えて、海外列強の中の日本という、ある意味での国際性を有しており、この面はまた長州では遅れて発展した要素でもあった。松陰の密航事件失敗もその一つの要因となった。伊藤たちの海外留学はこの遅れを取り戻すための藩是ではあったが、すでに維新が近づいており、藩としての新しい伝統を形成するまでには至らなかった。伊藤たちの知識が生かされたのが、最初の〈天皇親政〉であり、兵庫（神戸）開港の外交儀礼であったことも、そのことをよく示している。

志士としての人格形成が、こうして西南雄藩それぞれの内部でも、均一性と、また固有性（地方の固有性、門閥の固有性、そして個人の固有性）という二律背反の側面持っていることが、こうして長州と薩摩の平均的定位履歴を比較するだけで、浮かびあがってくる。これは明治以降の藩閥の形成を考える上でも、またその展開型としての、後の陸海軍の対立を考える上でも本質的であり、またそれを定位類型として観察解析することは、まだなされていないように感じる。そのための類型化の原型のようなものを、少し試みておきたいのである。

まず桂小五郎、つまり木戸孝允の例だが、彼の剣道への思い入れは、個人的なものであり、また藩是であったことが特徴的である。小五郎は下級武士（名門ではあった）の養子となったが、藩医であった実父の死に際してかなりの遺産を相続した。その豊かさがキャリアに反照することを嫌って、学問と剣に精進した。それが出発点である。藩校明倫館と地場の道場で頭角を現すと、江戸遊学を願い出て許可された（一八五二年）。その遊学の目的は、学問（兵学）と剣道の修練である。彼は当時江戸三大道場と言われた、斎藤弥九郎（一七九八〜一八七一）が主宰する練兵館で頭角を現し、一年ほどで師範代を務めるようになった。

これは例外ではなく、たとえば坂本竜馬が江戸遊学を願い出た時も、剣道修行であって、彼はこの三大道場の一つ、桶町千葉道場（いわゆる小千葉道場）で、やはり師範代になるまで上達している。

剣道場は江戸遊学、学問修得、情報の収集、そしてもう一つ、ネットワークを広げること、すでに広がっているネットワークの中に参加し、〈ひとかどのもの〉としての評判を得ることが大きな目的だったことが、江戸での小五郎と竜馬の行動を追うとよく分かる。つまりそれは、剣道、学問（多くは私塾）、そして〈人士となる〉（ネットワークに参加する）という、三つの目的をもち、この三位一体の上で、志士的定位の原型を勝ち取ることだったと総括できる。

そうするとやはり、薩摩の孤立性が気になりはじめる。西南雄藩、土佐藩や佐賀藩（鍋島藩）の志士たちも、やはり江戸遊学志向が強く、同じような志士的定位造型を見せる（坂本の例はすでにあげた。中岡慎之介や江藤新平も、少なくともその企図において、同じ志向性を見せる。こうした例は枚挙に遑がない）。薩摩の〈元勲〉たちには、そもそも遊学の志向性そのものが希薄であり、たとえば江戸を中心に活躍した西郷は、斉彬の江戸屋敷で〈御庭番〉に取り立てられたからだった。大久保の上洛、江戸入府も遅い。

それは一つには薩摩の固有の剣法、〈示現流〉が、実戦的な古武術で、藩の文化として自己完結しており、幕末の武道、剣道の隆盛をやや自尊をこめて白眼視していたことも関係していたかもしれない。〈示現流〉は、〈御留流〉すなわち、藩外への流出を固く禁じる固有の流派であり、開放的で習合的だった江戸剣道場と、その点でも対極的だった。つまり、大久保や西郷は、剣道に精を出したとしても、藩の武道文化を学ぶことしかできなかった。そこでの広いネットワーク形成はまったく期待できない。それがあるいは、彼等が剣道に打ち込まなかった真の原因だったのかもしれない。

江戸幕末の剣道場にもどると、それは二期にわかれていたことが分かる。まず〈天保三剣士〉の段階。その時期剣道は、すでに武道として確立され、階級を超えた広がりを見せていたが、それが〈学〉と融合する度合いはまだ弱く、したがって剣道場の多角的、多元的なハブ機能は弱かった。しかしなかったわけではない。それは幕末のハブ的剣道場の先駆型と見ることができる。

この時代「天保の三剣士」と言われた、男谷（おたに）信友（１７９８～１８６４）、島田虎之助（一八一四～一八五二）、大石進（種次（たねつぐ）、一七九七～一八六三）は、三名ともに藩士、武士出身の剣士である。これは江戸的な定型だが、これが次の三道場時代には崩れる（これからすぐ見る）。ただ彼等の履歴はすでに十分に階級混淆的であった。これは特に、地方の小藩から剣の力のみで江戸に行き、御前試合での上首尾で大道場を構えるまでになった、大石に顕著に見られる社会的上昇、つまり剣での立身出世であった。

島田虎之助も、大石に似て、地方での武者修行での高名をもって、江戸に乗り込んでいる。島田と大石の江戸での活躍を助けたのは、すでに剣豪の名を得ていた男谷だった。

この三人の中、二人は勝海舟、あるいは勝親子に関係がある。まず男谷信友は、勝家の祖、男谷検校の曾孫だった。越後の貧農の視覚障害者で、江戸に辿りついたときは行き倒れ同然だった、あの人物である。わずかな金をめぐまれ、それを増やし続けて、ついに大名貸しまでするようになり、息子たちは旗本株を買って、武士に仕上げた。その曾孫の剣客であるから、海舟には又従兄弟にあたる。そして島田虎之助は海舟の剣の師だった。それは破天荒なアウトサイダーだった父小吉が、やはり相当な剣の使い手で、島田と昵懇にしていた縁だった。

こうして見ると、剣士の名声を社会的に広めるのにフィクサーのような位置にいたのが、勝親子の遠縁にあたる男谷で、男谷が地方出の剣客の保護をし、顔をつなぎ、そして大きな道場まで持たせてやったのは、これも一つのネットワークの形成力であり、それは幕末剣道場の先駆型ではなかったかと思う。

幕末における武道、剣道の隆盛にも、男谷は関係している。ペリー来航翌年の一八五四年に幕府に〈講武所〉の設置を上申し、あの開明派老中阿部正弘の後押しもあって、古来

の武道と近代の砲術を合成したような武道所が開かれることになる（後に勝海舟や大村益次郎も関係した）。この動きはすぐ全国に広まっていく。すでに剣道は〈天保三剣士〉に見るように全国的な武芸熱の高まりと連動していた。それが幕府によって〈国策〉とされることで、一気に全国に広がり、〈武張った〉世の中が現出することになる。ここにはおそらくすでに、近藤勇や土方歳三につながる、〈剣道によっての社会的上昇〉の要因も大きく働き出していたにちがいない。『夜明け前』では、庄屋の若者も庭に矢場を設けて弓術の試練を始めたりしている。それを見た友人は笑ってこう言う。

〈武士が刀を質に入れて、庄屋の衆が弓をはじめるか。世の中も変わりましたね。』（藤村『夜明け前』、第一部、１－２３６ｐ）

幕末における剣道場で、最も有名なのは、竜馬も関係した千葉周作の〈玄武館〉だったが、木戸が師範代をつとめた〈練兵館〉も同じく大道場で、有力なハブ機能を形成していった道場だった。開祖の斉藤弥九郎は男谷と同年の生まれだが、はっきりと維新への趨勢を示す人物だった（維新にも部分的に参加している）。三大道場で、はっきりと藩剣士の系譜をしめすのは、四代目桃井直由の〈士学館〉のみであり、千葉周作は獣医（馬医）であった父が郷里を出奔したため、田舎で無名の少年として暮らし、剣の実力のみで士分に経上がっている（水戸斉昭に招かれて藩の剣術師範を勤めた）。その意味で、近藤や土方のめざすモデルとなったと言える。しかしより階級混淆性を如実に示すのは、斉藤だった。彼は農民の子で、丁稚奉公をしたがうまくいかず、そのまま路銀だけ親からもらって江戸に辿りついた。そして旗本の下男（小者）となる。働きぶりに感心し、向学心も豊かなことに気づいた主人は、剣道の修行をゆるし、つづいて儒学、砲術までその範囲を広げる（砲術の師は高島秋帆で、本格的なものだった）。

斎藤は名門の剣道場の師範代をつとめたあと、二十九歳で独立し、九段坂下で〈練兵館〉を立ち上げ、道場主に収まった（一八二六年）。まさに天保の改革が始まろうとしていた頃である。斎藤の息子も剣士として大成し、全国を武者修行して〈練兵館〉の名をたかめた。感銘を受けた長州藩主は、藩士たちの江戸遊学の場所として〈練兵館〉を指名する。その縁で、桂小五郎は〈練兵館〉に名をつらね、やがて塾頭をつとめることになる。長州藩士で〈練兵館〉に所属しながら江戸での活動（藩命を受けた、まだ独立の）を行った藩士には、高杉、井上（聞多＝馨）、伊藤、太田といった、錚々たるメンバーが含まれている。藩は、一つの藩政の方針として、はっきりとこの剣道場のハブ機能を評価して活用していたことが窺える事実である。

〈練兵館〉の背景にはじもう一つ有力な人脈があった。開設の資金援助をしたのが、開明派の幕臣、江川英龍（ひでたつ）（１８０１～１８５５）だったからである。英龍はすぐれた経世家として（二宮尊徳を招いて農政を行ったこともある）、また蘭学者として、あの長英たちの尚歯会とかかわりを持ち、ペリー再来に備えた海防策の中心人物となる。弥九郎は英龍の右腕として活躍することになる。その時の海防巡視には、すでに塾頭となっていた桂小五郎も参加した。

こうして見ると、幕末の剣道場が果たしたハブ機能がよくわかるだけでなく、弥九郎が旗本下男をしながらすでに砲術や兵学を学んでいたことに、幕末維新的定位の不思議な総合性、無・階級制が典型的に顕れているように思える。

剣道、武道における階級的上昇は、一方では、封建的兵制の廃止と近代的国民兵の創設の先駆でもあった。これは高杉晋作の〈奇兵隊〉創設を嚆矢とすることはもちろんだが、それは独立した運動ではなく、たとえば有名な攘夷家、清河八郎（一八三〇～一八六三　彼もひとかどの剣客だった）の唱えた〈急務三策〉には、階級、そして前科までを無視して即効性のある軍事集団を造ろうとする野心があふれていた。それは家茂の上洛の警護を口実として上申され、認可されたものだったが、集まってきた浪人や〈武ばった〉庶民は、血気盛んな反面、即席武道の烏合の衆であり、やがて分裂していく。その分裂から、〈壬生浪士〉が、そして〈新撰組〉が生まれてくることになる。それは〈奇兵隊〉を継ぐ官軍と衝突し、そして散っていく運命にあった。

この〈新撰組〉の場合が、剣道場の果たしたハブ機能と、その裏面となった〈新たに獲得した士分〉へのこだわりのアンビバレンツをよく示している。そしてそれは彼等だけの問題ではなく、たとえば千葉周作の〈士学館〉は、名の示すとおり、士分の、しかも上士のみに限定された道場であり、下士以下は、弟にまかせていた小さめの道場（小千葉道場）に押しやられることになっていた（竜馬も下士であるから、こちらで頭角を現した）。もちろん剣道が士分の象徴であることを考えれば、その士分へのこだわりが残るのは当然かもしれないが、そうではない全階級的な側面でのハブ機能の方が幕末では目立つのであり、そこがまた〈新撰組〉の悲しいこだわりを〈反動〉と総括するしかない、真の定位要因だったのではないかと思う。

しかしまた、再度幕末における階級的混乱と、その中での定位の模索、その一つの有力な手段としての剣道を、四民的抑圧の中で位置づけるならば、それは士分的定位が自壊をはじめたこと、そのことの反照が、弥九郎的志士性と、新撰組的反動性へと分岐していったのではないかと考えることもできる。つまりその分岐の前提は、やはり四民の中で、「門閥制度」の中で、閉塞していること、そのことへの反発であり、それは弥九郎も近藤も土方も、ほぼ共有していたのではないかと思う。

この幕藩体制の中核にある上下の階級的固定は、四民のマクロ範疇ではなく、その四民内部でも分断の永久運動を続けることはすでに確認しておいた。この要因は、抑圧への反発が、どういう新たな定位型を自己選択するか、たとえばそれが剣の修練の場合、どういう形で外化するかということを決定する要因であり、それがまた志士と近藤たちを前進する勢力と、後退する反動的勢力に分岐させていくことになる。つまり弥九郎の道場も、そこでの桂や高杉たちの交流も、すでに横並びに相互認知する〈人士〉としての交わりであるからこそ、その門閥横断的、階級無化的な本来のハブ機能が存分に発揮されることになる。これに対して近藤や、あるいはよりニヒリスティックな「人切り以蔵」（岡田以蔵、１８３８～１８６５）の剣、また佐久間象山を衝動的に斬った河上彦齊（げんさい）（１８３４～１８７２）、さらに横井小楠（一八〇九～一八六九）を明治になって襲った浪士たちは、すべて剣による〈士分〉の上昇に呪縛された、分断され孤立した剣士たちだった。それはたとえば新撰組での序列争いのすさまじさによく顕れている。それのみでも、彼らはすでに〈四

民平等〉と体現しつつあった志士たちの対極にある集団だったことが分かる。それはまさに、永久運動を続ける封建的分断の呪縛だったのである。

こうして概観してみると、幕末的融合、そこにおける多元性の対位法化において決定因となったのは、やはり江戸を通じて見られる、人為的な封建制度、封建的集権を支えるべき身分制度の四民そのものが生む内的な抑圧であったことがわかる。それは心学の平準観を生み、儒学や国学を逆側の家産国家的専制の妄念へと招き、蘭学を根本の近代化を可能とすべき経世へと向かわせた、根本の動因であった。この抑圧とそれへの定位的対応が、開国以来の動乱の早さにの中では、いよいよ本当の「解放」の可能性が見え隠れするようになる。そこに一身二生の影がすでに見え隠れすることになる。斉藤弥九郎はすでに剣を通じてこの二生を達成した。彼の道場に集まる志士たち、小五郎や高杉たちも、同じ方向での自己解放を活動の大きな動機としたにちがいない。

しかし面白いことに、もともと彼等がめざした自己展開、自己転生は、すでに江戸のシステムの中で用意されているものでもあった。抑圧のある身分を生き抜く。するとある時点で、その抑圧を「跡取り」に譲ることができる。つまり隠居制度である。この逆側に、養子縁組があった。すべてが家と家督を中心に動く社会において、家をつぶさないためにいかに多くの家が養子を選んだことか。桂小五郎もそうであるし、福沢ですら、次男であり、縁者に子供がなかったので、青年期までは養子である。つまり家制度、家督制度が、どの身分においても、桎梏と抑圧、そしてまた自分より下の〈家格〉に対する桎梏と抑圧を与える側になる動因ともなった。

このわかりやすい制度的重責とそこからの解放が、幕藩体制が公認した安全弁でもあった。そのことをよく示すのは、隠居はとくに名主や庄屋の場合、公認を要したということである。庶民の場合も、「跡取り」が家を継ぐことが、シネ・クワ・ノンであるから、やはり身分制度、家制度と直接に連結された、しかし封建的責務に疲れ果てた四民がだれでも夢見る「楽身分」であったことがわかる。この定位力学が幕末に至ると内部から瓦解をはじめる。それを典型的に示すのが、勝海舟の父、勝小吉の例である。

彼は封建的抑圧と、そこからの自己解放の苦闘、迷走を、隠居の身分にまで持ち込んでしまった。隠居をすることが、あらたな抑圧の形を生む。それは自分の人生の総体的反省へといたる。自分の人生が何の意義もなかったことを悟るのは、抑圧から解放されたはずの隠居の身分においてだった。解放が自己抑圧の因となる。こうして破天荒な自伝、『夢酔独言』が生まれることになった。

〈おれほどの馬鹿な者は世の中にもあんまり有るまいとおもふ。故に孫やひこ（※息子）のために、はなしてきかせるが、能々不法もの、馬鹿者のいましめにするがいいぜ。〉（勝小吉、『夢酔独言』１１ｐ）

冒頭でさっそく示される封建的抑圧は全般的、全体的、一般的であり、それは、幕末に志士たちがそこからの自己解放を志向する、本源的な抑圧と等質なものである。したがって息子の海舟の中にも一人の小吉がいるし、桂や高杉の中にもそれは確実にいた。そこから決定的に自己解放することが、彼等の志士としての誕生だったのである。この意味で勝

小吉の（自分から見ての）人生の無意味さは、まさに息子海舟の世代にとっての、「一般的な反面教師」となりえたのだった。この点を少し立ち止まって確認しておくことにしよう。息子海舟という対極を理解するだけでなく、江戸幕末的な抑圧の全体性を示すドキュメントは、この自伝に優るものはないからである。

旗本は幕府の直参で、知行地を持つことが原則だが（御家人は蔵米取、つまり幕府が集積した年貢から扶持米を貰う下士が主体となる）、その知行地は分散し、管理をしようとすると出費がかさむので、おおむね土地の名主に任せる慣習ができていた（これが田中正造たち、関東に強かった名主自治の伝統の一つの背景となる）。これはまた、旗本で窮乏した層ほど、下情に親しむ機会が増えたということでもあり、実際に小吉も家督を継いでからはしばしば名主、農民たちと触れ合う機会を持っている。この点は、海舟においては一種治世の方法としての「下情を知る」裏店界隈の散策となってあらわれるが（後述）、その原点は下層旗本と庶民の社会的交流の活発さ、近さであったと考えるべきである。

もともと直参であるから、徳川氏が「天下をとった」ことで、いわば家産国家的な妄想、「分捕り放題」的な妄想が一番膨らみやすい層であり、また実際に遅くまで幕府の軍制の中核を占めることが制度的に期待されていた（軍制の予備員としての負担がしかし、生活苦の一つの原因ともなってしまう）。こうしたストレスは、江戸初期の「旗本奴」という、「かぶきもの」（派手な格好で街を練り歩く者たち）の集団を生んだ。風紀を乱す者として、三百人以上が処刑される。これはまだ大阪の陣より前のことだが、幕府と旗本の関係のアンビバレンツの最初の顕れであったと考えることができる。

この鬱屈と、定向的な生活苦の増大が続き、小吉の時代には「不良旗本」が大量に登場する。いわゆる「飲む、打つ、買う」にあけくれる、あぶく銭蕩尽の人生に終始する旗本たちである。小吉は飲むも打つ（博打）もあまりやらず、着道楽と喧嘩、そして吉原の出入りにかまけた。ともかく立派な「不良」だったことは、天保の改革にひっかかって、隠居謹慎を命ぜられたことにも現れている（一八三八年）。これよりずっと先、まだ海舟が三歳のころ、もう隠居して好きなことをしたいと申し出て、兄にとめられている。では就職でもと活動したが、無駄だった。それまでに「不良」の悪名が広がっていたためである。

こうしてガス抜き、家督制度の抑圧の唯一の安全弁であった隠居制度は、彼の場合はまったく機能しなかったことがわかる。一度目は自分から申し出て親類に留められ、二度目は「けっこう面白く」やっている最中に、「お上」から隠居を命ぜられるという始末だった。

これを実人生の枠組みとして、その出発点が養子縁組の（彼にとっての）失敗だったことはすでに見た（第二章第三節）。その結果、出奔して西に向かい、ごまのはいに騙されて、文字通り裸一貫になり、宿の主人に勧められて乞食をしながら伊勢に向かったのだった。この縁組の失敗には、おそらく彼が庶出であったことも関係していたのではないかと思われる。これもまたしかし当時としては、それほど珍しくないことであった。庶出であろうが、ともかく家を絶やさないためには養子がいる。彼もこのパターンで、いわゆる「末期養子」（戸主の死亡によるかけこみ養子）として、相手方（勝家）から懇望された結果である。懇望はしたものの、でも実際に養子にしてみると、暴れ者でどこといって取り柄がなく見える。これが義理の祖母のいじめとなってあらわれる。

その面白くない環境で彼が最初に熱中したのが剣道である。そこではともかく強い者が勝つ。階級は（勝負の一瞬だが）無化される。そのことが暴れん坊の小吉を惹きつけたのだった。十一の年から剣道場に通うと、上達も早かった。ところがそこには勝家の上役の息子も通っていた。

〈其稽古場へ、おれが頭の（※勝家は小普請組という最下層の臨時職の一員で、その頭の石川右近将監のむすこがいでしが、おれの高（※勝家の石高）や何かを能知っている故、大勢の中で、「おれが高はいくらだ、四十俵では小給者（こきゅうもの）だ」といつて笑ひおるが不断のこと故、おれも頭の息子故内輪にしていおいたが（※内輪話ということにして我慢していたが）、いろいろ馬鹿にしおる故、或とき木刀にておもふさまたたきちらし、あくたいをついて、なかしてやつた。〉（勝小吉『夢酔独言』、〈十一歳のころ〉、２０ｐ）

それからしばらくして出奔し、伊勢参りから帰ると、また喧嘩にあけくれたが、ある時剣道場に通っている仲間と勝負をしてひどくやられてしまう。それがくやしくて、それからは一心不乱に稽古をすると、かなり強くなった。するとこんどは仲間と組んで道場破りを始める。これは当時はタブーで、形の稽古だけという道場も多かった。それでともかくやってみると、面白いように勝ち始める。弟子のような、子分のような若者が小吉の周りに群れはじめる。するとこんどはつきあいで金をどんどん使い、ついには借金の山をかかえてどうにもならなくなる。それでとうとうまた、二十一歳の時、着の身着のまま出奔してしまう。こんどは剣客として日本全国を歩いて回るつもりだった。

〈親が呉た刀やらいろいろ質におゐて、相弟子へも（※昔の道場仲間）金を借り、いろいろして漸々（ようよう）三両二分ばかり出来たを持て、そのばんは吉原にいって、翌日車坂の井上のけいこ場へゆき、剣術の道具を一組かりて、直に東海道へかけ出した。……
おれがおもふには、是からは日本国をあるいて、なんぞあつたら切死をしよふと覚悟して出たからは、なにもこわひことはなかつた。〉（同上、５４ｐｆｆ）

その諸国めぐりをする際に、ふと思いついて「水戸の急ぎの者だ」というと待遇がぐっとよくなるので、この手を使うことにした。まだ天保以前だが、水戸の勤王藩士はそろそろ活動をはじめていた。知り合いに会ったので、乞われるままに田舎暮らしをして、そこでは村の道場をひらき、弟子たちのつけとどけで、普通に生活ができた。やはり剣術による階級混淆はすでに広まっていたことがわかる。そもそも小吉が剣客としての自由気ままな生活に憧れた、その少しあとにはあの島田虎之助や大石進はやはり剣客としてのキャリアを諸国遍歴で初めていたわけだから、ここでも剣をめぐる小吉の定位型は、時代と共振していたことが確認できる。
剣客というものと、封建制度の関係は、一度まとめて考えてみると面白いかもしれない。それはおそらく、武士の農村からの離脱、デラシネ化の一つの系であり、デラシネ化→俸禄化（お勤め武士化）、というラインと、デラシネ化→浪人としての諸国遍歴が、まず対極としてイメージされ、後者は、再就職と、延長された諸国遍歴にまた分岐し、その最後

のパターンから、諸国遍歴を自己目的化した、剣客、剣豪の定位心象が生じたと思われる。それはこの逆も真なりで、剣豪といい条、やはり御前試合での大成功と、剣術指南役として、有力者、あるいは大藩のおかかえになるというのが、少なくともオプションとして願望された上がりの姿だった。佐々木小次郎と宮本武蔵の巌流島の決闘を、就職活動ととらえるのは、あまりに即物的かもしれないが、しかしたしかにそういう面があったことは、両者の履歴を見ればすぐに浮かび上がる事実でもある。

こうして見ると、天保の三剣豪あたりから顕在化する、幕末特有の新しいオプションは、つまりは大都市での（特に江戸での）道場主として、剣豪でありながら、自力での生活基盤を開拓するということであり、これがまた一つのモデルとなって、剣客の自立性を高めていったのだろう。武蔵の時代にも、たしかに吉岡一門のような名門の道場指南役はいたが、それはごく一部であり、また貴顕の支援を不可欠としていた。それが庶民のあいだでやっていけるようになっていったのも、その真の背景は、やはり貨幣経済の拡充と剣術の「需要」の増大であったと見るべきだろう。

これはこれで、士分の定位にとって、やはり大きな意味を持ったかもしれない。つまり少数者の自立にしても、やはり自立は自立であり、デラシネ化した「旅宿の境涯」（徂徠の用語だった）の俸禄武士からすると、士分を自己目的化できる、大きな魅力を持っていたかもしれないからである。これがまた桂小五郎や、坂本竜馬が剣に打ち込んだ一つのモチベーションにもなっていたのではないだろうか。つまりハブとして剣道場を活用することも大切だが、その前に、剣そのもので腕をあげ、そうした人生の「夢」をオプションとして持っておくことも、やはり隠れた大きな魅力となっていたかもしれないからである。

したがって子分を沢山かかえて、そのつきあいの見栄で借金火だるまとなった小吉も、自立を夢見て、その夢のおかげで破産した口かもしれない。江戸を再度飛び出して、剣客として切死をする覚悟で、水戸藩士をかたりながら大名旅を続け、たどりついた村で剣道場の師範としてかなり楽な生活をするというのは、まことに「不良旗本」並みの支離滅裂でありながら、幕末の桂や竜馬たちの定位型を、ばらばらな形で先取りしているように見えることが、とても面白いと思う。

そうこうしているうちに、心配した実家は甥を迎えによこす。仕方なくついていくと、実父がまあおれところにも来いと言う。行ってみると、そこには座敷牢が用意してあって、「おれをぶちこんだ」のだった。

それからすぐ工夫して、一月で柱を二本ぬけるようにする。しかしそこで思いめぐらしてみると、すべて自分が悪い。それで大人しくそこにいることにして、手習いを始め、軍書を読みはじめた。宮本武蔵の姫路城三年幽閉伝説を思わせるところも、少しだけある逸話ではある。実際に小吉はこの座敷牢に二十一歳から二十四歳まで、三年間幽閉されていた。「くるしかつた」と一言で要約するが、それはそうだろう。ここまでで小吉の人生の第一幕は終わる。

就職に失敗すると、結局彼は刀や道具ものの取引の仲介や、争い事の仲裁をやって生活費、遊び代を稼ぐようになった。遊びの他で一番熱中したのはあいかわらず喧嘩である。これには師匠がいた。

親類のところに行ったおり、用人で（※小者、中間あたりか）剣術のできる源兵衛という男がいて、喧嘩をやったことがあるかと聞く。小吉はある、大好きだと言うと、明日は祭りで一喧嘩やることになっているから、いらっしゃってはどうかと誘う。小吉は二つ返事で祭りの喧嘩場にかけつけ、大立ち回りを源兵衛といっしょに演じた。それからは源兵衛を師匠とあおぎ、「しまいには上手になった。」

この江戸の名物と言われてひさしい祭りの喧嘩だが、この時点ではやはり相当に階級混淆が進んでいたことがわかる。たとえば上で少し触れたあの「旗本奴」の時代には、おなじ暴れ者たちも、たとえば「町人奴」というのが別にいて、対立こそすれ、混淆はしていなかったようだからである。しかもこの場合ははっきりと武家社会の最底辺の者が、剣術もやり、喧嘩の師匠もやり、そこでの相手は町人庶民であるから、喧嘩そのものが階級無化の場となっている。

同じ構造は、大阪でも見られた。あの洪庵塾の時代の福沢がそうで、塾生といっしょに喧嘩のまねごとをしてあるくのが一つの楽しみだった。大阪の喧嘩はしかし江戸とはちがって、野次馬はいなかった。すぐにみんな戸締まりして勝手に喧嘩させておく。それがしかし福沢たちには面白かった（『福翁自伝』）。

〈それから時としてはこういうこともあった。その乱暴さ加減は今人の思い寄らぬことだ。警察がなかったから、いわば何でも勝手次第である。元来大阪の町人は極めて臆病だ。江戸で喧嘩をすると野次馬が出て来て滅茶苦茶にしてしまうが、大阪では野次馬はとても出て来ない。夏のことで夕方飯を食ってぶらぶら出て行く。申し合わせをして市中で大喧嘩の真似をする。お互いに痛くないように大層な剣幕で大きな声で怒鳴って摑み合い打ち合うだろう。そうすると、その辺の店はバタバタ片付けて戸を締めてしもうて寂（ひっそ）りとなる。喧嘩といったところが、ただそれだけのことで、外に意味はない。〉（『福翁自伝』〈緒方の塾風〉、６９ｐ）

喧嘩には臆病な大阪の町人は、スリには厳しかった。祭りの日に喧嘩気分でちょっとした悪さをした諭吉は、「チボ（スリ）だ！」という叫びとともに、大勢から追いかけられ、命からがらの体験をする。それは大阪ではスリは捕まえられると、「すまき」にされて川に投げ込まれるからだった。土地柄が不思議に能くわかる、面白いといえばいえる二分法である。これはこれでまた、際どく階級混淆的な寸景であると言えるだろう。

ともあれ、福沢たちの喧嘩の真似事と、小吉の師匠つきの実戦的喧嘩は、やはり無階級的な気晴らしの場であるということで共通している。福沢たちも貧書生とはいえ、武家の若者たちである。それが大騒ぎをして楽しむ時には、今風に言うならば、「ごく普通の街の不良たち」に変容している。この不良の無階級性が、ともかく一度やったら忘れられない楽しみを彼らに与えたらしい。

これはやはり、封建制末期に固有な、身分制の解体現象であると思う。祭りと喧嘩、不良青年と喧嘩の現象は、都市的な普遍現象と言える面を持っているが、武士の跡取りが下男を師匠として町人相手の大立ち回りを演ずる、あるいは武家の青年たちが、待ちで騒いで、町人たちがばたばたと戸締まりするのをむやみに面白がる、それは彼等の日常におけ

る難渋にもはりめぐらされた「らしさ」の息の詰まるような封建的上下の規範なしには考えられない解放感であり、高揚感である。それはかれらなりの「ええじゃないか」であったと言えば、幕末的カオスの上下からの呼応がある程度予感できるかもしれない。

喧嘩にはしかし、剣道場での手合わせに似た、もう一つの機能があった。「相手の器量を計る」という社会機能である。たとえば小吉は、あの剣豪として名高い島田虎之助の兄が上京した際に、街の案内をしながら、これを試みている。彼に喧嘩を売ったのではない。街を案内しながら一緒に歩いているとき、「喧嘩をして見せ」、相手の反応を探ったのだある。

〈ある日吉原へ俄（※にわか踊り）を見にいつたばん、馬道で喧嘩をして見せたら、金十郎はこはがつた。金十郎は国ではあばれものだといいしが、江戸へきてはつまらぬ男であつた。〉（『夢酔独言』、９７ｐｆ）

こうしてみると、たしかに江戸下町を本拠としたこの「不良旗本」には、それなりの人生知と社会性が備わっていたことがわかる。そしてその社会性も人生知も、これといってどこにも使いようがなかったことも。それがまさに、江戸封建制の生んだ全般的な閉塞状況であった。唯一、息子の麟太郎だけが、彼にとっては見果てぬ人生の夢、この閉所からの開放の夢となった。本家である男谷家の縁者が大奥にいて、麟太郎を将軍家の若君の「ご学友」として招いたからである。しかしその夢も、この若君の夭折でついえてしまった（後に江戸城の差配を任された海舟は、この時の縁故で、難しいと言われていた大奥の改革をやりとげることになる）。

天保の改革、その定番の奢侈禁止令にひっかかって蟄居の身となった小吉は、『夢酔独言』をつづり終わると、ともかく楽隠居にはなったことを確認する。親孝行の麟太郎もいる。それがなによりの慰めかというと……どうもよく分からない。

〈おれのよふの子供ができたならば（※自分に自分のような子供がいたならば）、なかなか此楽（このらく）は出来まいとおもふ。是もふしぎだ。神仏には捨てられぬ身とおもふ。孫や其子はよくよく義邦（海舟）の通りにして、子々孫々のさかへるよふに、こころがけるがいいぜ。〉（同上、６ｐ）

この斜めに構えた調子が、また深川の江戸下町言葉にぴったりとあって、近代的言文一致を先取りしているのは、なんとも……奇妙で、そして妙に胸を打つ。生き方の幕末的閉塞を後ろに置いて、語り口だけが時代の先をいってしまったような、実に奇妙な齟齬を感じるからかもしれない。

子孫への教訓は、定番通りに始まるのだが、だんだんにまたどこか斜めの方向にずれていく。それは斜めなのだが、かならずしも無理無道な方向ではない。

〈無益の友は交るべからず。多言をいふ事なかれ。目上の仁（※人）は尊敬すべし。万事内輪にして慎み、祖先をまつりてけがすべからず。勤は半時はやく出づべし（※勤は一生もたない人だった）。文武をもつて農事とおもふべし。〉（同上）

ありきたりの忠告が、突然農本的心象と融合する。これはほとんど本能的な連想ではないかと感じる。生活破綻した旗本の中に、やはり封建のイデオロギーは脈々と生き続けてている。さらに今度は、個性的な為政、治世に通じる感覚がこう言わせる。

〈農事をもすべし（※これは実際の農事のこと）。百姓の情を知る。世間の人情に通達して、心におさめて外に出さず守るべし。〉（同上）

身をいれて聞き始めると、にやっと笑って、こうそらす。

〈第一に利欲はたつべし。夢にも見る事なかれ。おれは多欲だから今の姿にあつた。是が手本だ。〉（同上）

また個性的な人生知を見せる。

〈家来はびんぼう人の子をつかうべし。年季たちたらば分げんの格にして片付けてやるべし。〉（同上）

この奥行きのある配慮には、実際に家風の背景がある。生活に余裕のあった小吉の長兄は、小者、中間の年季が明けると、御家人の株を買って一人前の武士にとりたてていた。これもまた積極的な階級での混淆であり、裸一貫からのしあがた男谷家の家風であったことは間違いない。
かくて、小吉は、道をまもる決心をするのだが……少し手遅れだったかもしれない。

〈おれはこれからはこの道を守る心だ。……けっして理外の道へいることなかれ。身を立て、名をあげて、家をおこ（す）事がかんじんだ。たとへばおれを見ろよ。理外にはしりて、人外（じんがい）のことばかりしたから、祖先より代々勤めつづゐた家だが、おれがひとり勤めなゐから、家にきづを付けた（※無職人の強いコンプレックス）。是がなによりの手本だは。今となり、醒めていくら後悔をしたからとて、しかたがなゐ。〉（同上）

そこからまた時勢の変化を見て、泰平つづきの世の中での勤めを皮肉る。

〈恐多（おそれおお）くも東照宮の御幼少の御事、数年の御難戦故に（※今川に人質となった時代があり、難しい戦いが続いた、そのおかげで）、かくの如くに泰平つづき、万事きかつ（※飢えかつえること？）にうれゐわすれ、妻子をあん楽にすごし、且（かつ）は先祖の勤苦おもいやるべし。夫より子孫はふところ手をして、先祖の貰つた高を取うけて、昔を忘れて美服を

き（※小吉は着道楽で身代を何度もつぶした）、美味をくらいうし、ろくの御奉公をも勤めざるは、不忠不義不孝ならずや。ここを能（よく）おもつて見ろ。今のつとめは畳の上の仕事だから、少しもきづかひ（※気遣い、心配）ないは。万一すべつてころぶくらいの事だ。〉

この本音と様々な建前（りっぱな忠告の数々）の交錯、実見し、実地に試した数々の人生知、それを〈子々孫々〉に教えようとしては、反面教師でしかない自分にため息をつく。このめまぐるしいモザイク化こそ、閉塞状況の中でもがき、そして何一つたしかなものを手に入れることのできなかった、才気ある、下情と世間をよく知る、一人の人間の挫折を如実に記録している。

発話の多重化、多元化がこれほど露わに聞こえる肉声の史料も珍しい。わたしは初めてこの声を聞いた時、ドストエーフスキイ中にしばしば登場する、屈折した〈悔悟者〉を連想した。つねに自分の人生を自分の尺度ではかり、自尊と悔悟と言い訳がめまぐるしく交叉する、あのペルソナたちである。それもまた閉塞状況が生んだモザイク的定位の記録であってみれば、この連想の核心部は、人為的強権下での人間的定位の分裂解体という普遍性を持つのだろう。そしてこの閉塞からの自己解放こそ、小吉に続く世代、海舟たちの世代の人生と時代の課題となったことが、自然に感得されるのである。

文体というものは、意外とストレートに人格の核心部を写像するものである。そのことも確認しておこう。小吉の文体はその意味で、幕末的人格の貴重な自己表出のドキュメントとなったのだった。

（近代本論第十九回テクスト終わり）